

昭和初年代の社会運動と手紙というコミュニケーション

——運動と雑誌の挫折の後に

Social Movement and Communication by Letter in the Early Showa Period:
After the Setbacks of the Movement and the Magazine

新藤 雄介

Yusuke SHINDO

福島大学行政政策学類

Faculty of Administration and Social Sciences, Fukushima University

要旨…本研究は、農民運動家・渋谷定輔と有力地主の娘・池田むめの間で昭和3～4年に交わされた往復書簡を資料として、渋谷が農民自治会の挫折による『農民自治』の終刊後に、次なる運動と雑誌の立ち上げへと移行していく過程を分析した。その際に、手紙というメディアによる相互の書記行為が、渋谷と池田にもたらした認識とその変化に焦点を当てた。

キーワード 社会運動 手紙 渋谷定輔 『農民闘争』 『農民自治』

1. 問題の所在

大正期以降、労働運動や農民運動が徐々に広がり、争議が行われるようになっていった。こうした社会運動は、その活動を支える雑誌（機関誌）の出版とともに行われた。とはいえ、労働運動や農民運動に対しては厳しい取り締まりが行われ、またしばしば組織内部での立場の違いなどによって、分裂や解散を繰り返した。よく知られたところでは、『文芸戦線』と『戦旗』の対立、講座派と労農派（『マルクス主義』と『労農』）の対立などがあった。

そうした中で、運動の挫折から新たな運動への移行という点には、必ずしも十分な関心が払われてこなかった。特に、運動の挫折は、運動者にとってそれまでの運動のあり方自体を対象化して見直す機会となり、新たな知識の獲得や考え方の変化を促すことになる。こうした変化を経て、新たな運動と雑誌の創刊へと動き出す過程は、資料の空白もあり捉えることが容易ではなかった。そこで本研究では、農民自治会の分裂と『農民自治』の終焉という挫折を経て、そこから新たに『農民闘争』という雑誌が誕生する前までを、農民運動家であった渋谷定輔という個人に着目し明らかにすることとしたい。

2. 先行研究の知見と本研究の方法

渋谷定輔に焦点を当てた研究としては、思想史の視点から分析した安田常雄の『出会いの思想史＝渋谷定輔論』や農民運動史に思想史を加えた視点から分析した坂本昇の『近代農村社会運動の群像』がある。これらの研究では、渋谷定輔個人の思想や、渋谷が関わった社会運動の動きが明らかとなっている。その一方で、渋谷が雑誌『農民自治』での挫折を経て、後に小説家となる埴谷雄高や写真家となる土門拳らが参加した、雑誌『農民闘争』の発行へと至る過程は、明らかにされてこなかった。

そこで本研究では渋谷定輔と手紙の相手である池田むめが、この期間に手紙というコミュニケーションを通して、どのように運動や社会への認識を変化させたのかという点に着目する。なぜならば、手紙によるやりとりとは、単に個人の考えを紙に書きつけるということだけではなく、書くという行為によって自己への内省を促すとともに、相手からの返信による考えの相違や一致を経て、自己の考えの深化や修正や変更を迫られる相互行為だからである。その際に着目したのは、①当時における社会運動の理論的指導者であった山川均・福本和夫への評価、②運動における理論と実践の関係性、③池田むめの運動に対する逡巡、④自己批判の極北としての農民＝プチブルという認識への到達、という点である。これらを捉えることによって、渋

谷が極めて急進的な『農民闘争』へと参画するまでの前提状況を明らかにする。

資料としては、富士見市立中央図書館に所蔵されている渋谷定輔文庫のものを主として取り扱う。特に、渋谷定輔と池田むめ（うめ、後に渋谷黎子）の間で昭和3年2月から昭和4年8月にかけて取り交わされた約90通の往復書簡（手紙）を使用する¹。

3. 山川均と福本和夫に対する評価と運動の方向性

埼玉県南畑村に住む渋谷定輔と福島県栗野村に住む池田むめとの接触のきっかけは、渋谷が昭和2年9月に福島県での講演し、池田が聞きに行っていたことであった。その後、渋谷と池田の間で年末頃から手紙のやり取りが始まり、昭和3年2月頃から頻繁な手紙のやりとりとなった。この頃、渋谷たち農民自治会は初の男子普通選挙で、選挙に関わらない非政党同盟の立場を取ったがその支持を広げることができず、運動の方向性で内部に違いが生じていた。そうした中で当時、社会運動において影響力を持っていたのは、福本和夫と山川均という2人のマルクス主義理論家であった。そのため、この2人への評価が運動の方向性に関わっていた。

農民自治会の分裂が決定的になった頃に、渋谷定輔は池田むめに宛てて、「我国の今までの運動は、それを国際的立場から最上に批判する時、福本イズムを先頭に山川イズムも又、吾々もまた誤謬をおかして来たのだ」（1928年7月25日）として、福本イズムと山川イズムに加え、自分たちの運動を批判的に記した。池田もこれに対し、「福本イズムにせよ、山川イズムにせよ、又流れを別にする運動であれ、共に現在までどんなに大きな誤謬ををかして来た事か」（1928年7月28日）と返した。

しかし、渋谷は、全国農民団体の統一と無産政党の統一によって、「山川派と、福本派の理論的対立関係を、かかる実行的、実証的闘争によつて解決し、我国解放運動の危機に助力したいと思ふ。〔……〕近日中、山川氏と秘密に逢ふことになつてゐるが、これは絶対福本派のものに秘密にしてくれ。」（1928年9月9日）として、山川均との協力を考え始めていた。さらに、その後「私も此の頃、山川均氏の書くものにグングン引つけられて行つてゐます。山川氏はやっぱりプロレタリア出身ですから書くものが平易で、やはり福本氏とは違つて、考へ方なども非常に労働者的ですし、それに何と言つても長いこと苦勞して来てゐますからね」（1928年11月21日）と述べ、「プロレタリア出身」で「労働者的」な山川均を積極的に評価するようになる。

このように、渋谷は無産政党の統一を主張していた山川均と考えを同じくすることから評価を変化させ、さらに山川の労働者的な視点を含めて評価するようになった。

4. 社会運動における理論と実践の関係

渋谷が山川均を肯定的に評価するようになった背景には、渋谷が社会運動において理論と実践の関係について、不満を抱いていたことがあった。渋谷は、「私は如何に左翼理論と意識を把握すると自任する、たとへそれがプロレタリア出身の闘士であらうとも、彼れが、無批判的又は二重生活的に、理論と実行＝思想と生活とを切り離し、又は、空虚なる名聞にあこがれるならば、如何に鋭き理論をもつとも彼、又は彼女の人格をどうしても尊敬し、又は信頼することは断じて出来ないのだ。」

（1928年9月9日）と手紙に書き、社会運動において、理論と実行が切り離されてしまっている状態に対して疑義を呈していた。さらに、「私なども二三年前までは東京へ出て理論家志願をしようと思つたが、この頃ではそんなことにたいした価値をみとめません。社会運動はすでに、実行の時代です。理論は重大です。しかし、実践に裏付けられぬ理論は空論で三文の値もありません。そんな理論は、所謂マルクスボーイとレニンガールにおまかせしておいていいと思ふ」（1928年11月21日）として、実践なき理論への批判を行っていた。

渋谷がこうした認識を形成するのには、生活背景や社会背景の違いが影響していた、渋谷は特に理論に関する知識を獲得しやすい環境にある人々について、次のように批判していた。「だが、大学出のマルキストよ、君達が、労働者農民出身者を、理論に學術に劣るが故にをもつて軽蔑するならば君もまた、自らの思想の方へは心境の未熟に目を向けるべきだ」（1928年9月9日）として、大学出の理論家への反発を池田に伝えていた。加えて、渋谷は階級の違いについても、次のように書いていた。「私がブルジョア出身の所謂コミュニストがプロレタリアートの心理を理解せず、只理論によって、すべてをあてはめ

¹ 渋谷定輔「手紙」（池田ムメ宛）（1928年2月20日～1929年8月（日不明））渋谷定輔文庫454-1～454-38（富士見市立中央図書館蔵）。池田ムメ「手紙」（渋谷定輔宛）（1928年2月24日～1929年8月29日）渋谷定輔文庫455-1～455-49（富士見市立中央図書館蔵）。

解決しやうとする点に不満を感じるはその故です。レニンは、最もよく、労働者農民の心理を理解し、それを科学と結び付けたが故に、あれだけの偉大なる革命がなし遂げられたのだと思ひます。あなたが、小ブル出身者にしてよきコミュニストになられる参考として、一農民はこれだけの言葉を付け加へておきたいと思ひます」（1929年3月（日不明））と、ブルジョア出身者への不満を述べるとともに、池田にウラジーミル・レーニンを引き合いに出しつつ、見習うように書き送るのであった。

渋谷は社会運動における理論と実践の一致を極めて重視した。それゆえに、その乖離が大きく見られた大学出やブルジョア出身者に対して、厳しい目を向けていたのである。

5. 池田むめの自身の立場性に対する逡巡

渋谷定輔が社会運動において、プロレタリアの視点を重視し、（理論と同時に）実践を決定的に重視する立場は、有力地主の娘であった池田むめにも向けられることとなる。池田と渋谷の手紙は、池田が渋谷に指導者となってくれるように頼むことから継続されていく。当初、池田は「私はまだ運動するには、少し若すぎますし、それよりも、社会から、家庭から、の圧迫のために、運動らしい運動は出来ません」（1928年2月24日）として、運動そのものについては消極的であった。その一方で、「私の今までのいや、現在までの友人は、理論に置いて、学術に置いて本当に素晴らしい人達が大かったかも知れない。だけど其れ等の人達は、いづれも、小ブルジョア、インテリゲンチヤの集れで有って、イズムを武器に持つ、小タイラントで仕かなかつた。私は、徒らに其れ等の人達のみ攻める者ではないですが、出来るなら、私は、素晴らしい理論家よりも、実行家の真切目さが欲しい」（1928年8月30日）というように、運動の実践家である渋谷を必要としていた。

こうした池田に対して、渋谷は「あなたが、中産階級乃至上流階級の境遇に於ける観念や生活感情に於ける矛盾は、私の如く純プロレタリアートとして自然成長的過程を辿るものより、より一層の苦悶と矛盾を感じるでせう。しかし、その苦悶と矛盾から断じて逃避せず、勇敢にそれを戦い抜いて行かれることを私は求めたい」（1928年8月31日）と、池田の思想と実生活との間の矛盾を指摘するとともに、その克服を期待した。

そのため、池田は渋谷との手紙のやり取りを通じて、渋谷が批判する立場の人々と自分自身のあり方との重なりを自覚せざるをえなくなっていく。池田は、「それにしても私は、なんと太（駄）目な事か、私は自分を思ふと淋しく成る。ふんと永い間汲み込んだプチブル的な怠惰心だ」（1928年9月4日）として、自らの「プチブル」としての立場を自覚していく。この結果、池田は「私は勿論思想的に否、思想に生き様と勤め悩んでいます」（1928年9月28日）として、自らの思想と自らの生き方との間の乖離に苦しみ、逡巡することとなる。

その後も池田は、「それも、私は現在の自覚を許さない家庭を捨て、自己のプチブル意識と行動とを捨てんとする苦しい願ひなんです。私は泣いています。どうして私は勇ましく前進出来ないんでせう。現在の女性の良くべき途は実に困難です。二十才の私にはトホウにくれます。而し私は行動と正しい理論とを、進まなければならぬと思ひます」（1928年11月5日）と逡巡を繰り返す。しかし、それでも手紙のやり取りを通して、池田は「母達の言葉と、ブル気分の安らかさに審美的な情緒に引き入れられ様とする時、あなたの云ふ強烈なプロレタリア意識が強く私を引き止めた」（1928年11月23日）と書き、支えとしての渋谷の存在を指摘する。その上で、「私は克つたのです。とうとう私は克つ事が出来たんです。私の苦しみは尊い試練に外ならなかつたからです。私の心を曇らしてゐた一切を私は静かに捨てる事が出来たんです。かくて私は、第三階級で有るべき、『真実の仕事』の中へと行こうと考ひました」（1928年11月23日）と決意する。

しかし、その後も池田の母がむめの上京を認めないなど、運動と生活の間で揺れ動く。渋谷との手紙のやり取りに加え、平凡社社長の下中弥三郎との関わりや、女性運動家の奥むめおとのやり取りもあり、最終的には昭和4年8月に池田は家族に告げぬまま家を出て、渋谷の運動に加わることとなる。

6. 渋谷定輔による自己批判の極北

池田むめに対して、その生活環境から「プチブル」としての意識を自覚させた上で、その立場から脱することを求めた渋谷定輔は、自分自身に対しても「自己批判」を追及していくことになる。渋谷は、池田の家出が決定的になった昭和4年8月に、次のように手紙を送っている。「私は最近と言っても一ヶ月程前から、再び自己批判と清算に全力をあげておます。昨年アナーキズム思想からマルキシズムへの転向としての自己批判と清算であったが、それは、むしろ組合、集団としての運動上に於ける自己批判と清算であったのです。それが今年は過去、上半期の斗争を経た私は、今度、自分自身の、人生的自己批判と清算に迫られてゐるわけです。〔……〕私には自分の人生観の上に、観念的に強くこびりついてゐる、自然発生的な、そして

それは不知不識にエゴイズム^{エゴ}なり、宗教的精神主義的となり、あるいは、農民と言ふ小ブルジョアの階級性から発生した小ブルジョアのイデオロギーとなつてゐたと言ふ点です。私は目下これの完全なる克服に全力をあげてみます」（1929年8月（日不明））。渋谷は、自らの「人生的自己批判」を行うに至り、わずかながらでも土地を所有する農民であることが「小ブルジョア」であるとまで書かなければならないほど、徹底するようになっていた。

こうした渋谷による過剰なまでの自己批判の徹底は、理論と実践の間の境界線を抹消しようという意志に基づいていた。「真のコンミュニストとは、マルキシズムの方法論を、正しく生活する者であり、理論と実践の弁証法的統一なくして、マルキシズムの方法論を正しく生活することは出来ない。そしてそのためには頭の先から爪の先まで、戦闘的唯物論によって、理論と実践の弁証法的統一がなされねばならぬ。理論のみに没頭して、唯物弁証法を固定化したところに福本氏の小ブルジョアの観念論への脱線があり、近くは雑誌『労農』派の紳士諸君がそれを繰り返してゐる。唯物弁証法とは理論と実践によってのみ正しく理解され得る。私はこれを昨年闘争の体験から学び取つたが更らに今年は自己の「人生観」の上に、これを武装する為め、徹底的な自己批判と清算に迫られてゐるわけです」（1929年8月（日不明））と、池田に書き送った。

理論を主張する者たちによる理論と実践の不一致に敏感に反応していた渋谷は、その構図を池田に突きつけた。当初は運動への参加にまで踏み込んでいなかった池田は、渋谷との往復書簡を通じて自身の「プチブル」性に自覚し向き合わなければならなくなる。そうして逡巡する池田は、最終的には自らの意志ですべてを捨てて家を出ていくことを決める。その結果、渋谷は池田が「プチブル」性を自覚したのと同程度以上の厳しさを自らに課すこととなり、自身の思考をより根源的な方向へと進めていかざるをえなくなつていったのである。

7. まとめと知見

渋谷定輔と池田むめとの往復書簡は、農民自治会と『農民自治』が崩壊し挫折していく中で始められた。渋谷は、今後の運動の方向性として農民団体の統一と無産政党の統一が必要だと考え、当初は否定的に捉えていた山川均への評価を、無産政党の統一という点から肯定的に評価するに変化した。渋谷が社会運動において重視したのは、理論と実践の一致であった。そのため、理論と実践の一致が伴わない大学での理論家やブルジョア出身者に対して強い批判を加えていた。こうした渋谷の運動観は、手紙を通して池田にも伝えられることとなり、池田は自らの「プチブル」性を自覚せざるを得なくなつていく。池田は逡巡を繰り返すが、最終的には渋谷の手紙を通して自らの思想を実践することを選び、家を出るのだった。そして、渋谷は自身にも理論と実践の一致を厳しく課し、わずかながらでも土地を所有する農民である自らを「プチブル」として自己認識し、その解消の必要を池田に伝えるのであった。

このように、渋谷定輔は池田むめとの手紙のやり取りを通して、池田に厳しく自己の生活環境を問い直させ、家を出るという行為を実践させ、自らの運動に参加させた。そうした中、渋谷も自らの立場を自己査問せざるを得なくなり、より急進的に理論と実践の一致を自身に課すのであった。こうした時、渋谷は『農民闘争』へと参画するための状況が整うのであった。

参考文献

- Golden, Catherine, J (2009) *Posting it: The Victorian Revolution in Letter Writing*, University Press of Florida.
- 長谷川貴彦 (2014) 「救貧法体制の動揺——エセックス州における貧民の手紙の分析から」『イギリス福祉国家の歴史的源流——近世・近代転換期の中間団体』155-77、東京大学出版会
- 長谷川貴彦 (2015) 「エゴ・ドキュメント論——欧米の歴史学における新潮流」『歴史評論』77号、48
- 長谷川貴彦・成田龍一・桜井厚・平井雄一郎 (2015) 「個人史研究の現在、そしてエゴ・ドキュメントへ」『歴史評論』77号、23
- 紅野謙介 ([1992]1999) 『書物の近代——メディアの文学史』ちくま学芸文庫
- 松井康浩 (2014) 「試練に立つ家族——大テロル下の権力への手紙／家族の手紙」『スターリニズムの経験——市民の手紙・日記・回想録から』59-92、岩波現代選書
- 小野寺拓也 (2012) 『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」——第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社
- 坂本昇 (2001) 『近代農村社会運動の群像——在野ヒューマン主義者の思想』日本経済評論社
- 渋谷定輔 (1986) 『農民哀史から六十年』岩波新書
- 渋谷黎子 (1978) 『この風の音を聞かないか——愛と闘いの記録』家の光協会
- 新藤雄介 (2019) 「雑誌『農民自治』と渋谷定輔の社会運動——農民における理論と反理論の相克」『出版研究』49号、45-66
- 安田常雄 (1981) 『出会いの思想史＝渋谷定輔論——『農民哀史』の世界』勁草書房